21st ICFIA へ参加して

日本分析化学会　高島章子

はじめに

2017 年 9 月 3 日（日）から 8 日（金）まで，ロシアのサンクトペテルブルクにて第 21 回フローインジェクション分析国際会議（21st International Conference on Flow Injection Analysis）が開催されました。今回，私が報告記事を執筆させていただくことになったのは，2017 年 5 月の第 77 回分析化学討論会時に行われました, JFIA 編集委員会の懇親会に参加させていただいた際に，編集委員会よりご依頼がありましたためです。研究者ではない私が執筆させていただくのは大変恐縮ですが，これまでに何度も FIA 関連の国際会議に同行させていただきましたので，ほんのお礼になればと思いお引き受けいたしました。Accompany としての参加ですので，ほとんどが旅行記になってしまいますことをお赦しいただけましたら幸いです。

ロシアへの道のり

現在，日本人がロシアへ旅行をするにはビザが必要で，今回は観光ビザではなく，業務ビザ（教育・科学・芸術そのほか文化活動従事者向け）が必要でした。旅行業者に頼めば手数料が 1 万円以上かかりますが，個人で申請すれば無料ということで，ロシア大使館にも一度行ってみたかったこともあり，自分でやってみることにしました。申請のためには，ICFIA 実行委員会からの招聘状が必要となりますが，手続きをしてからメールの添付ファイルで届くまでに約 1 ヶ月，その後，原本が届くまでに EMS で送ったというにもかかわらず 1 ヶ月もかかりました。ビザの申請書はウェブ上で簡単に作成できるようになっており，招聘状と申請書をもっていざ六本木のロシア大使館へ出かけました。受付開始時間の 3 分後に到着したにもかかわらず，すでに 40 人の順番待ちでした。大使館では日本語が話せる女性スタッフが親切に対応して，1 週間後の出来上がりでよければ, 費用はかかりませんでした。学会会場のホテルの予約にも，クレジットカードの番号の他に，カードの両面のコピー，さらには自筆のサインのコピーも必要ということで，これまでに訪れた国とは違う手ごわさを感じました。

サンクトペテルブルクへ

成田からモスクワまで 9 時間弱, それから乗り継いで 1 時間でサンクトペテルブルクに到着しました。モスクワでの入国審査では，意地悪な質問をされないかと心配していましたが，幸い，特に質問もなく入国することができました。その際に入出国カードというものを渡されますが，私は帰りの際にこの半券をなくしたかと思い，空港へ向かうタクシーに引き返してもらう寸前の冷や汗ものの経験をしました。

サンクトペテルブルクには夜 8 時頃到着し，空港からタクシーでホテルに向かう途中では，真っすぐに伸びる広い道路の両脇のライトアップされた建物の美しさにすっかり見とれてしまいました。特に，ライトアップされたエルミタージュ美術館は素晴らしかったです。

サンクトペテルブルク市内

サンクトペテルブルクといえば何といってもエルミタージュ美術館ですが，普段から頻繁に美術館に通っている絵画好きの私としては，滞在中に少なくとも 2 回は訪れたいと思っており，事前にインターネットで入場券を購入していました。到着の翌朝，早速出かけてみましたが，4 つの建物がつながっており，事前の入場券を持っている人専用の入り口を探すのに一苦労でした。係員に尋ねても，「Outside left!」（その門を出て左，という意味），「One is NO, two is YES! Do you understand?」（一つ目の入り口ではなくて，二つ目の入り口，わかりますか）のような曖昧な説明で 20 分もうろうろしてしまいました。やっと入場できたものの，今度は鑑賞のスタート地点となる「大使の階段」に行きつくまでが大変でした。その後はガイドブックの案内に従って部屋をまわりましたが，元が宮殿のため，複数の部屋がつながっており，自分がどこに向かっているのかわからなくなり，迷路の中を有名な絵を探し歩いているような感じでした「写真 1」。ところどころに中国人の長蛇の列ができており，そこではレオナルド・ダ・ヴィンチやラファエロの作品を皆がスマートフォンや iPad で撮影していることがわかりました。それ以外にも，ルーベンス，レンブラント，エル・グレコなど，日本ではめったにお目にかかれない作品が数多

写真 1 エルミタージュ美術館　ラファエロの回廊

くあり，さすがのコレクションだなあと思いました。絵画以外にも，ロシアの歴史について説明された部屋や古代エジプトの石像などあらゆる時代のあらゆるものが展示され，美術館というよりは何でもありの博物館という印象でした。午後は比較的新しい時代の作品があるエルミタージュ新館で，主に印象派の作品を鑑賞しました。作品のほとんどが，「モロゾフとシチューキンのコレクションより」と書かれており，これだけの膨大な数の作品を所蔵していたとは，どれほどの邸宅だったのだろうと思いました。新館のほうはツアー客も少なく，大好きなマティスやモネのコレクションをゆっくりと鑑賞でき，至福の気分でした。

他には，サンクトペテルブルク発祥の地であるペトロパヴロフスク要塞を訪れました。この要塞の中にある聖堂には，ピョートル大帝やエカテリーナ 2 世のお墓もありました。中は大変豪華な作りで，教会というよりは宮殿のような雰囲気でした「写真 2」。要塞を出た後，ネヴァ川にかかる長い橋を渡り，街のメイン通り，ネフスキー大通りへ向かいました。この通りには，豪華な建物が数多く立ち並んでおり，ビーフストロガノフを考案したストロガノフ伯爵の宮殿やミシンのシンガー社の建物（現在は本屋）「写真 3」もあり，ヨーロッパ風の街並みを堪能することができました。近くには，純ロシア風教会の「血の上の救世主教会」もあり，「写真 4」様々な文化が共存している見どころの多い街でした。

ロシアといえばバレエの国ですが，モスクワのボリショイと並んで有名な劇場がサンクトペテルブルクのマリインスキー劇場です「写真 5」。この劇場は公共の交通機関では行きにくい場所にあり，バレエの公演は終わるのが夜遅いということで鑑賞はあきらめていましたが，ホテルに交渉したところ，往復のタクシーを手配してくれるということになりました。今回の滞在中で鑑賞できる日が 1 日だけあり，早速，劇場のウェブサイトでチケットを予約しました。A 席でも 6000 円くらいで，座席も事前に指定することができました。ご一緒いただきました伊藤一明先生の奥様，ありがとうございました。普段，日本ではバレエはほとんど見たことがないのですが，今回のプログラムは「シンデレラ」で，ストーリーもわかりやすく，衣装や振り付けも現代的なものでした。劇場には，地元の方々が家族や友人と着飾って来られており，

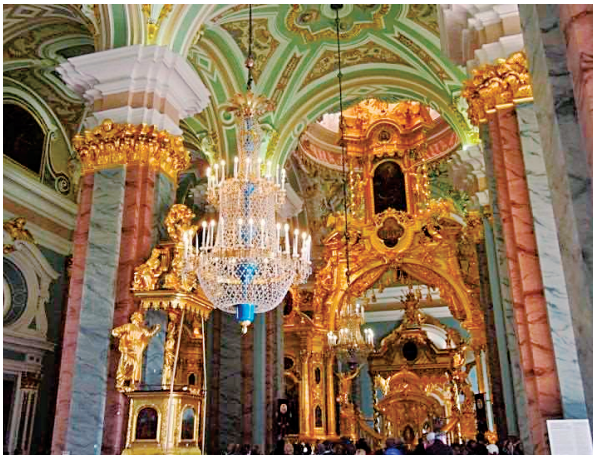

写真 2 ペトロパヴロフスク聖堂内部

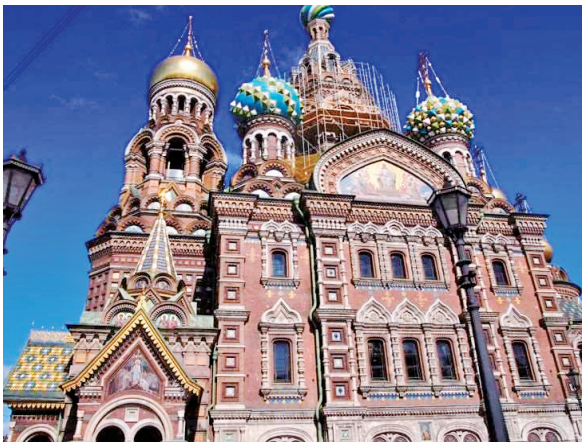

写真 4 血の上の救世主教会

写真 3 元シンガー社の建物

写真 5 マリインスキー劇場

バレエという文化が日常に溶け込んでいるのだなあと感じました。特に良かったのは，開演前にホワイエのカフェで，イクラやサーモンが山盛りにのったバゲットと白ワインをいただけたことです。おかげでますます優雅な気分で鑑賞することができました。

21st ICFIA

21st ICFIA は，ネヴァ川を 2 分するヴァシリエフスキー島に位置する Solo Sokos Hotel Palace Bridge で行われ，エルミタージュ美術館やペトロパヴロフスク要塞までは，それぞれ橋を渡って徒歩 20 分の距離でした。近くには大学関係の施設や博物館などが多数ありました。9 月 3 日の夕刻，Registration の後に行われた Welcome cocktail では，本場のピロシキが出るのではと期待していましたが，あいにくミートパイのようなものしかありませんでした。ロシアの方に聞いたところ，最近は健康志向のため，油で揚げる昔ながらのピロシキはあまり人気がないとのことでした。日本ではロシア料理と言えばまず思いつくボルシチですが，こちらも本場のものは，日本のようにトマトは入っておらず，ビーツで作られた紫色のものでした。特に癖もなく，どこのレストランで食べても美味しかったです。

今回の ICFIA は実行委員の方が大変熱心に準備されたようで，これまで参加したどの会議よりもエクスカーションが充実していました。9 月 4 日の夕刻からは，学会会場から歩いてすぐのサンクトペテルブルク大学の中にある，メンデレーエフの住居兼研究室である博物館を見学しました「写真 6」。メンデレーエフと言えば，周期律を初めて発表した研究者ですが，博物館の中には手書きの周期表や実験に使った天秤などが展示されており，化学と関係のある仕事に携わっているものとしては大変興味深く見学ができました。

9 月 5 日は終日エクスカーションで，ネヴァ川の船着き場から高速船でフィンランド湾を渡り，ピョートル大帝の夏の宮殿であった世界遺産「ペテルゴフ」へ行きました。広大な敷地の中に数多くの噴水と庭園，そして大小様々な宮殿がありました。私は渡航前に NHK のサンクトペテルブルクの特集番組で予習をしてあったのですが，ペテルゴフの噴水にはピョートル大帝の時代から，電力のポンプは一切使われておらず，土地の高低差を利用して地下の水車をまわして水を噴き上げているとのことです。ガイドの方の説明では，それがよくわからなかったので，参加者のほとんどは延々と噴水を見せられて，少しお疲れの様子の方も多かったです。1 時間ほど歩いてようやく大宮殿前の大滝にたどり着いたときには，圧巻の景色でしたが，あいにく大宮殿に入るチケットを購入するには長蛇の列に並ばねばならず，1 時間の自由時間ではあきらめざるを得ませんでした「写真 7」。

9 月 7 日の Gala dinner は，「戦争と平和」の主人公ナターシャの First ball の舞台とされる Palace of Prince Alexander Bezborodko で行われました。会場に入る前に，着飾ったロシアの女性スタッフのお出迎えがあり，小さなグラスに入ったウォッカがふるまわれました。今回の ICFIA は G. D. Christian 先生の 80 歳の誕生日を祝う記念の会でもあったため，実行委員長の Andrey Bulatov 先生より参加者がメッセージを書いた「戦争と平和」の本が贈られました。乾杯の後，会場には，よく耳にしたことのある舞踏会の音楽が流され，早速，ダンスが始まりました。Christian 先生も今回の会議の秘書をされていた Irina さんとダンスをされて，大変ご機嫌な様子でした「写真 8」。（後で調べたところ，それらの曲は浅田真央選手がフィギュアスケートで使っていたハチャトゥリアンの「仮面舞踏会」やチャイコフスキーのバレエ，「くるみ割り人形」の行進曲であったことがわかりました）。日本人には社交ダンスは難しく輪の中に入りづらいので，今後，欧米で ICFIA が行われる際には，事前にダンスの講習会を開いていただけるとありがたいです。ロシアの民族ダンスも披露され，ロシアの文化を満喫できました「写真 9」。

写真 6 メンデレーエフの研究室　九州大学の学生さんと

写真 7 ペテルゴフ　大滝と大宮殿

バンケット会場からホテルへ向かったのが夜の 11 時半でしたが，これでエクスカーションは終わらず，さらに夜中の 0 時半から，ホテルから 20 分ほど歩いてネヴァ川にかかる「宮殿橋」が跳ね橋になるショーを見にいきました。肌寒い上に小雨が降っており，会議参加者の 3 分の 1 は不参加でした。私は報告記事の責任もあり参加しましたが，傘を持っていなかったところ，塚越先生がお手持ちの傘を貸してくださり，ご自分は上着のフードをかぶって見学してくださいました。ネヴァ川が航行できる季節には，川にかかる橋が順番に跳ね橋になり上がっていき，サンクトペテルブルクの名物になっています。全部見るには数時間かかるため，ホテルから一番近い宮殿橋が上がったところで，私も脱落してホテルに帰りました。

おわりに

渡航前はガイドブックの説明でロシアに対してかなり警戒心をもっていましたが，行ってみると，街の人々は日本人に対して親切で，治安が悪いということも特に感じませんでした。以前は，「日露シンポジウム」という会議があり，分析化学会の先生方はロシアの研究者と活発に交流されていたようです。帰国してから調べたところ，フィギュアスケートやテレビの CM で使われている聞きなれた音楽が実はロシアの楽曲だったとわかり，親近感がわきました。個人ではなかなか行くことのできないロシアで貴重な経験ができ，同行させていただいたことに感謝いたします。今回は分析化学会の年会直前というハードな日程で，参加を迷っていた私を誘ってくださった本水先生，準備からいろいろとお世話になった手嶋先生に御礼申し上げます。2018 年のバンコク，2019 年のマルセイユの会議も楽しみにしております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

写真 8 Irina さんとダンスに興じられる Christian 先生

写真 9 Christian 先生を囲んで FIA 研究懇談会の先生方と